

【JETOBだより】



クリアでは、JETプログラムを修了し、今世界中で活躍しているJETOB・OGの方々からのメッセージを、毎月機関誌「自治体国際化フォーラム」に掲載しています。

日本で過ごし、その後も日本への思い、日本との関係を大事に、様々な人生を歩んでいるJETOB・OGの方々からのメッセージを、今月から、メールマガジンでもお届けしていきますと思います。(機関誌より短いバージョンになります。)

住んでみて気づいた「日本」

国際教養大学副学長 マーク・ウィリアムズ

群馬県に2年間赴任

1979年から2年間、「英国英語教師養成プログラム」(BETS)に参加し、群馬県に赴任しました。基幹校を含むほとんどの県立高校で教えることができました。

授業の形態は様々で、時には全校生徒を一同に集めて母国イギリスの話をしたり、英語の特徴について説明したこともありました。生徒達はシャイでなかなか質問をしてくれませんでした。各学校での最初の質問で最も多かったのは、「彼女はいますか?」でした。

当時、群馬県内の外国人講師が少数だったこともあり、私は地元ではちょっとした有名人でした。赴任の翌日には趣味の音楽で地方紙の見出しを飾りましたし、その後も妙齢の女性に道を訪ねただけで「彼女か?」と書かれたこともあります。現在とは隔世の感があります。

オックスフォード大学では日本語学を専攻し、夏休みには南山大学に留学して日本語を学びました。だから群馬では、上州弁も含め日本語を短期間で話せるようになりました。生徒に英語を話してもらいたかったのですが、学校では日本語をあまり話さないようにしましたが。

BETSが変えた私の人生

BETSに参加して教師になりたいと強く思うようになり、カリフォルニア大学

バークレー校の大学院に進学して日本文学、日本史、日本の宗教の研究をしました。東大留学中に、母国のリーズ大学の「中国学部の日本語講師」の求人に応募したところ幸いにも採用されました。数年後に「日本学部」を設立したところ順調に発展し、現在の学生数は「中国学部」を上回り JET プログラムにも多く参加しています。そして 2011 年 9 月からは、知己である中嶋嶺雄学長に誘われたこともあり、秋田市にある国際教養大学にお世話になることになりました。国際貢献、地域貢献を目指した大学で、小学校の先生のための英語教授法のプログラムや公開講座を開催したり、秋田県内の自治体と交流協定を結んで留学生の派遣などの交流も行っています。教員には JETOB も 2 名います。

JET 参加者には、JET の経験を長い目で捉えてほしいと思います。短期間でみれば、カルチャーショックや帰国後の「逆カルチャーショック」など辛いこともあるでしょう。でも、私にも、日本に住んでみなければわからなかったこともあります。日本での経験は、中長期で見れば大きな財産になっていることを忘れないでほしいと願ってやみません。

詳しくは、「自治体国際化フォーラム」5月号をご覧ください。

http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/pdf_271/08_jet02.pdf

ⁱ JET プログラムの前身の 1 つ。英国人英語指導教員招致事業 (BETS : British English Teachers Scheme) と米国人英語指導主事助手 (MEF : Monbusho English Fellow) 制度の両プロジェクトを発展的に継承させたものが、現在の JET プログラム。

CLAIR